

「現代国語」学習法を求めて

— 年間学習の「自己評価」を中心に —

奥 本 昭 三

I はじめに

昭和五十三年度末、「現代国語Ⅰ」一年間の学習を終えるに当たり、「現代国語Ⅰ学習のために（ファイル）の自己評価」・学習ノートの自己評価」及び「一年間の現代国語Ⅰ学習の反省」について、プリント三枚に記入したものを提出させた。

記入内容は精粗さまざまであったが、八十七時間に及ぶ学習活動の反省の中には、生徒個々の痛切な思いがこめられている。これらは「自己評価」の形で記入させたものであるが、その声の真実に謙虚に耳を傾けて、これからの私自身の学習指導に生かさねばならない責務を痛切にかみしめている。生徒の声は私の学習指導の反映であり、私の反省そのものであり、貴重な宝として生かしてゆきたい。以下、その実態の主要なものをとりあげることにする。

II 「現代国語Ⅰ」の学習を終えて

A 「現代国語」の学習法は何流か

五十三年度はじめ、一年生に対し「私の現代国語学習法」として何をめざそうとするか、一派を生み出そうとする心構えを二百字で書かせ、その題目にサブタイトルをつけさせた。そのサブタイトル

を示す。

歩き流／読み読み流／なまけない流／はじかき流／地道流／コツ
コツ流／弱点補充流／長嶋茂雄流／積極流／意欲流／バリバリ流
教科書記入流／自己流／マイペース流／一日一歩流／予習主義流
必勝流／ニガテ意識克服流／タメ（為）タメ流／ちょっとだけよ流
視線パッチリ流／気分変革流／聞く・書く・授業を大切に流／努力
する流／自分本願流／授業のみこみ流／きまじめ流／少しづつ流
ガツガツ流／辞書中心流／じっくり流／ガンバリ流／数学流／積み
重ね流／チャレンジ流／書き覚え流／先読み流／せんまい時計流
じっくり流／タコマ流（タノシク、コツコツ、マイニチ）／予習復
習みっちり流／文庫読破流／自分主体流／実用完成流／しつこく流
／とつぶりつける流／ストレート流／思考読書流／意欲満々マイペ
ース流／教科書仲よし流／本・ほん・ホン流／かくじつ流／ノック
アウト流／継続は力なり流／生活学習流／ジワジワ流／教科書かき
こみなんでも書きまくり流

中学校での国語学習の反省から、高校での新しい「現代国語」学習を始めたばかりの時期における新鮮な気持ちや意欲を感じとるこ

とができる。「現代国語」学習に臨んで、現代国語の力を自分のものとする意欲を育て、自己の学習法に、真に個性的な名前を冠し、自ら一派を編み出す覚悟をどのように具現させるかが課題であった。

B 「現代国語Ⅰ学習の反省」から

1 とくに心に残っていること

一年間の「現代国語Ⅰ」学習で「とくに心に残っていること」の項目からいくつかをあげてみよう。

a 文章の内容や主題のわかりにくいものが多かった。

b 先生がよく言ったボリュウム、ボリュウム、ボリュウムということだけ。

c 成績が振るわなかったことが心残り。

d 先生が我流だといって短歌を読んだこと。

e どんなに小さな一粒の米でも毎日拾えば一年ですごい量になる。

f ノートとファイルのことだ。完成されたとは思えないけど、一生懸命やったとはいきれると思う。

g なんといつたつてあのいっぱいのプリントです。

h プリントを一度に百枚くらい配られた時。

i 本をながめる。さわってみる。ひらいてみる。ただしポケットに入れてもって帰らないこと。

j 先生のしゃべり方が心に残っている。聞いていないものは、おいていくぞといった感じのしゃべり方であった。

k 串田孫一さんの「新しい人間」が心に残っている。

l 休みがすんだあとに話して下さったこと。グループにわかれて話

しあったこと。

m 先生が話された各作家の生いたちなど。

n 中学の時の甘い考えを捨てることが大切だ。

o いろんなことを文章に書いたこと。

p 現国の学習の巾広さ。

q とにかく毎時間、溜息をつくひまもなく、恐るべきスピードで配られたプリントのことが一番印象深い。

r ボリュウム・ボリュウム・ボリュウム・ボリュウム・ボリュウム。

教材や学習活動のあり方、教科書を離れての話、ノートづくり、プリントファイルのことなど、生徒は敏感に教師の意図を受け取っている。

2 学習の進め方について

先生への注文・希望・意見の項目のもと、私自身の「話し方」・「学習の進め方」・「説明のしかた」・「板書のしかた」などについて自由に記入させた。マイナス面を中心にとりあげる。

△話し方▽

○語尾が聞きとりにくい。／○とても早口で聞きもらす。／○多少、事務的。

△学習の進め方▽

○形式的すぎる。／○テンポがだんだん早くなる。／○もう少しゆっくり進んでほしい。

△説明のしかた▽

○わるい、無表情なのがいけないと思う。／○きまりきったことをきまった調子で話される。／○説明のしかたが早い。／○特に自己満足的な一人授業になるようにみうけられます。

△板書のしかた▽

○フイーバーしてくるにしたがって字が乱れる。／○テンポが早くなるにつれて乱れる。／○やじるしが多すぎる。／○文字を○で囲んだり、それを線で結んだりするのが多すぎる。

△その他▽

○指導におもしろみがない。／○生徒が発言するときあいづちをうつのはいいけれど、それが大きい声だといやみつたらしい。／○とにかくすべてがハイテンポだ。／○いつも先生の話だけですこし受身的。

これらのことばひとつひとつが私自身の胸にこたえた。これらの指摘をどのように私の課題として改善していくか、真剣に考えねばならない。有難いこれらの戒めを、毎時間のこととして実践の場で具体的に改めてゆかねばならぬ。多くの脳が私を凝視している。この学習指導の実態から再出発しなければ「学習法」の発見はありえない。

3 二年生にむかって

二年生に向かって「私の現代国語」学習法について、そのアイデア、夢、希望、くふうを記入させた。一年間の学習活動は、生徒自身の生活の中に重く、その心の中に深く沈んでいる。生徒たちは

その中から新たな向上への意欲を浮かびあがらせ、「現代国語」の学習を自己の問題として把握しようとしている。

△学習態度に関するもの▽

a 計画だけでなくコツコツとやる。(毎日寝る前の十分間必ず漢字を書く。)

b テストでまともな点をとるように努力する。

c 成績をあげたい。(10に)

d 国語の力をあげて人間の感覚と心を知りたい。

e 予習に力を入れ。(本読み、漢字、意味調べ。)

f 授業態度をよくしたい。(聞きのがしがないように洩らさず聞きたる。)

g 小さいことにこだわらず、広い視野をもって勉強していきたい。

h 学習したところの他の作品もできるだけ読む。

i 授業を大切にしてく。

j もっと楽しいものになりたい。

k 授業中いねむりせん法。

l 国語辞典をつかうようにしたい。

m 現代国語の教科書をひととおり目をとおしたい。

n 詩、俳句、短歌を学習したら、その作者の他の作品を読んでいきたい。

o 予習、復習をもっとやろう。

△ノート・ファイルに関するもの▽

a 色わけをしてカラフルなノートづくりをしたい。

b ノートに作品としての題をつきたい。(本にしたい。)

c ノート製作につとめること。

d 先生のおっしゃったこともノートに書きたい。(板書の写しのみでなく。)

e ノートを愛し、ポリュームをふやしてゆきたい。

f 一度はノートを読みかえし、見出し欄を役立つものとして充実していきたい。

g ノートづくりをとことんまで。(板書だけでなく自分の考えをもちこんで。)

h 「ひとくちかんそう」を続けたい。(ノートに。)

i 少しずつ毎日漢字の練習をしたい。

j ノートに漢字のページを設けてポリュームをつけたい。

k 漢字(とくに熟語)をもう少し勉強すべき。

l ファイルと漢字帳は日頃からやっておく。

△読書に関すること▽

a とにかく本を読むこと。

b 本を読んで感想を書くこと。

c できるだけ沢山の本を読みたい。(天までとどけ流)

d 読書を大いにやってゆく。

e 本をもう少し読みたい。

f どうにかして読解力をつけたい。(本を読むのが一番と思う。)

g 忙しい中で本を読む。

h 本を読んで一言でもいいから感想を書く。

i いつでも本が読めるように枕元、手さげの中に本を備えておく。

j 読書すること。(八十冊をめざして。)

k とにかく読書、読書、読書。

l 本を読んで心を豊かにしたい。

△読むこと・書くこと・作ること・話すこと▽

a 新聞をもっと活用すること。

b 新聞のコラムを読んでまとめたり、感想を書いたり。

c 物語、詩を作ってみよう。

d 「○○○○エッセイ集」を作成したい。

e 意見を人前で言えること。

f 偽らない自分の意見を持つこと。

g 自分の考えをはっきり持つこと。

以上は、一クラス(一年一組)の例であるが、これらの願いのひとつひとつの実現にどのように応え、手をさし伸べていくかが私の課題である。学習態度は短時日のうちに形成されるものではない。五十分の、一か月の、一学期の、一年の積み重ねが必要である。一時間ごとの授業展開の中で、その願いがひとりひとりの胸に沁み入る授業を構築してゆかねばならない。一時間をゆるがせにせぬ指導者自身の生き方が「生命」を吹き込むことになる。

ノートづくりを力に結晶させ、読書領域の開拓に具体的に力を添えてやる必要がある。教育が真の教育として成立してゆくためには、毛穴から魂を入れねばなるまい。新聞の活用を身をもって示し、あるいは創作への意欲を実らせ、また自分の意見をもつための効果的な場の設定や機会の発見を具体的に示唆しなければならぬことを痛感する。

Ⅲ 「学習ノート」の実態

A 「学習の歴史」としてのノート

ノートは「自己の分身」である。ノートを大切にすることは、自分自身を大事にすることである。四月、授業の初めにノートづくりの要件を指示し、まず「形より入れ」と強調した。「作品としてのノート」づくりをめざし、めいめいが「ノートの王国」を築きあげたための要件として示したのは、次のような事柄である。(プリントによる。)

1 予習・復習の記録

○読み、考え、調べたことすべてをノートに記録してゆく。勉強した事実を証拠としてノートに刻みつけてゆく。文章を声に出して読んだならば、「何月何日、どういう文章を読んだ」という事実を書きとめておく。

2 フィラノート(フィラノートの実物を示す。)

○教科書・本に目次があるように、ノートにも目次のページを設けること。最初のページを目次のページとする。

○「目次」のためにページ番号をうつ。見えやすいところに明確にうつこと。

○上欄には「見出し欄」が設けてあること。月日を書き、いつ記録したものがはっきりわかるようにすること。必要な「見出し項目」を書き出し、ノートを上手に利用できるようにくふうすること。

○うす鉛筆を使わぬようにすること。「現代国語」の学習にお

いては、Hを使用しないこと、必ずHBあるいはBを用いること。3 作品としてのノート

○ノートは自己の分身である。世界に唯一のものである。「作品」をめざそう。

およそ以上のような指示のもとに、ノートを大事にしてゆくことを強調し、機会をとらえては繰り返し注意を促した。

B 「学習ノートの自己評価」から

1 ノートづくりでめざそうとしたこと

「学習ノートの自己評価」のなかで、この一年間「現代国語I」ノート(自己の分身)でめざそうとしたこと「心構え」の項目のもとに記入させた。いくつかの例をとりあげる。

a 板書をノートに写すだけでなく、自分からノートに書きこんでこうとした。

b ボリュームのある自分だけのノート。

c とにかく見やすく、復習しやすく、役立つノートにしようと思いました。

d まず黒板に書かれたものを写すとき、正確にきれいに写すようにしようと思いました。第二には、ノートに書いた意味が自分で書いたものと同じようにすべて理解できるようにしたいと思いました。第三には、ノート一ページ一ページに、ページ数、見出しその他構成などをよく考えて文字を書きたいと思いました。e できるだけいいねいに読みやすく書こうと努力した。

f ノートを自分の作品として他人のものと違った内容のあるノートにしようとした。

g 何も考えないで、ただ黒板に書かれた事を写すということだけはしたくないと思った。それだけでは決して「自己の分身」と言えるようなノートにならないであらうし、ましてや家で再びノートを開いた時に授業の内容を思い出さずなど、とうてい無理だからだ。だから私は自分が思考した事や教科書を調べた事などをできるだけもり込んだノートをめざした。

h とにかく現代国語は授業が大切だと思っていたから、ノートを見ただけでその日の授業が再現できるくらいに授業での小さな事でも書こうと思った。

i 高校に入って初めての現代国語の時間にノートの事について話されて、「ポリューム」ということを特に強調されたのでまずはポリュームづくりということを目標にした。

j 一目で何を習ったか、何を考えたかがすぐわかって、習ってすぐはもちろんのこと、何年たつて見たときにも、高校一年生の時の頭に入れたこと、考えたことがよくわかるようなノートにしたいと思った。

k 一目でわかり、どこにもないノート。現代国語のわくを乗り越えていけるようなノートにしたいと思った。

これらには個性的なノートをめざして、一年間の「ノートづくり」に精進しようとした姿がうかがわれる。もちろん、目標が充分に果たせなかった悔いや痛みも自己評価の他の項目で語られているが、

ポリュームをめざすために、また世界に唯一のものとするために、あるいは作品としてのノートをめざすために、私の具体的な助言が乏しかったことを痛切に反省している。生徒は手さぐりで自己のノートづくりに無我夢中で取り組んでいたという感が深い。

2 「私の理想のノート」から

「ノートの自己評価」のなかで、自己の「理想のノート」を語らせた。学習ノートに題目をつけるとしたら、またサブタイトルはどうするかと問いかけた。以下そのいくつかの例をあげてみる。

- 私の分身ノート／○無限／○現代国語・文学誌／○あすなろ／○性格のわかるのノート／○紙の足跡／○わたしだけの現代国語／○私と私の心ーその軌跡／○青春ノートー私の分身ー／○現代国語学習日誌／○字積帳／○記ー我が人生の題材を求めてー／○交響詩第一番「げんこくの詩」／○私の学習記録ー現代国語Iー／○過程（プロセス）ー現代国語の学習ー／○現代国語Iの学習の証明／○でこぼこな道ーポリュームをめざして／○大いなる遺産／○一期一会ー現代国語Iノートー
- 「理想のノート」を「夢みる」ことは、各自が「ノートの王国」への道を歩むことである。どのような手助けができたかは、まことに心許無い限りだが、授業にあたっては心して記録に欠かせない日づけを必ず書き、一時間ごとの学習活動が板書項目でわかるように努めた。板書はできるだけ項目を整理し、記号を多く使うようにした。「ノートの夢」を育ててゆく楽しみとその実現が、国語学習指導の力を支えてくれるものである。

枚) / ○「人間の二重性」(5枚) / ○「糧の発見」(17枚) / ○「中学國語の反省」(20枚) / 「進化論における説明(朝日)」(1枚) / ○「私の現代國語学習法」(20枚) / ○「紙風船」を読んで(16枚) / ○「わたしを束ねないで」を読んで(16枚) / 「のちの思いに」を読んで(15枚) / ○「ぐりまの死」を読んで(16枚) / ○「詩」(プリント)を読んで(16枚) / ○「バッタと鈴虫」を読んで / ○「おおいでてこい」を読んで(4枚) / ○「読んでみたい本」(16枚) / ○「わたしの好きな色」(12枚) / ○「わたしの好きな季節」(7枚)

B 「ファイルの自己評価」から

1 ファイルのくふう

プリントとして配布された資料は、必ずファイルしておき、学期ごと一回提出するように指示した。「ファイルの自己評価」の中から、ファイルについて「私のくふうした点」をとりあげる。

a とにかくあとから読んでおもしろいと思うので、できるだけきちんとそろえるように心がけた程度です。

b 分類する順番を作者やジャンルによって考えた。

c ファイルの内容ごとにかけて、番号をうった紙を途中にはって少し出し、とじていても見えるようにした。

d のちを利用する際に、利用しやすいように目次をできるだけ詳しく、そして私自身にわかるように、特に目次をくふうしたつもりだ。

e とにかく同じ内容のものが二冊にわたらぬように注意した。

f No.1とNo.2では、習った順にファイルしたので番号とページ数と一致しなくなったため、自分で番号を一枚ずつ書いた。その時、No.1とNo.2のページ数を続けた。しかし全体的にはくふうしたとはいえない。

g あまりないけど、ずれが少ないようにファイルした。

h 目次を最初、画用紙を切って書いていたが、レポート用紙のほうのみやすいのでレポート用紙にした。

i 一冊ごとに表紙に色をつけた。題目、ナンバ―を大きく書いた。

j 最初は多くても一枚一枚ページ数を書いてしたが、書いてもページ数が目立たないのでインデックスで単元ごとにナンバ―を書いた。その方がよく区別がつき、どこが出たときすぐ出せる。

k 目次の項目をなるべくこまかにわけた。ファイルの背中にも、ちゃんとファイルの必要なことを記入してわかるようにした。

l はじめて提出したとき、上下をそろえなさいと先生に言われたので、その次からは上下をそろえてみればえをよくした。それからひきやすいように、インデックスを貼って使いやすいうようにした。

m インデックスをつけて、それをだんにして開きたいところがサツと開けるようにした。プリントの左上にページをうちなおして、ページをわかりやすくした。

n インデックスをつけ、表には番号、裏には簡単に内容を書いた。目次にはその番号がよくわかるように少し太いマジックではっきり書いた。教科書との対照ページをつけた。

○二つおりにしてファイルしたり、そのままファイルしたり、どちらがみやすいかを考えた。

P まず百枚前後を一冊として、全体的に厚さをそろえるようにした。目次をナンバード別とページ別にしてわかりやすくした。

Q なるべくひきやすいように五十番ごとに折り目に赤い色をつけたが、見にくいのでその前後にも色をつけた。それから課題図書の感想又は折り目の上の四分の一に緑色をつけた。

R ナンバーどおりのファイルでないから、すぐ場所がわかるように紙をはってみた。

S プリントの整理は、なるべく似た内容のものを集めていった。そして配った順番が早いものからとじてゆくようにした。

t ノートと同じ順番にした。目次をわかりやすくした。

u 授業で利用したプリントは、ラインをあちこちひいて勉強のあとを残した。

v 一枚のプリントを二つに折らずに一枚そのままですること。この方が見るときにパッと一枚全部を広げて見ることができるので良いと思った。

w 形式的には何もこれといったくふうはできなかった。でもファイルをするときそれぞれのプリントに愛着をもって接したつもりだから、いつでも気易く手にとって読むことができるかと確信している。

x 「まえがき」「あとがき」「裏の出版所」「ねだん表」などをつけたこと。

y 内容をグループごとにわけ、グループの出しやすいように小さな

紙をはりつけ目印をつけた。本立てにおいてきれいにみえるように、一冊、一冊、枚数をできるだけ等しく上下がそろうようにした。

ファイルには、表紙にファイルの内容を示す題目を書き、目次をつけ、ページ番号をうち、利用しやすいファイルづくりをするように指示した。多くのものは分冊とし、凡そ十冊位どのファイルも完成させていた。

2 ファイルづくりから学んだこと

自己のファイルに命名するとしたら、どういう題目をつけるか、またサブタイトルはどうするかを考えさせた。以下その例をあげる。

- 私の第二のノート―ふと見た時に役に立つ―
- 進歩―現代国語Iを学習した軌跡―
- プリちゃん―国語学習用ファイルの実態―
- ファイル・オブ・パラダイス―ファイルから愛をこめて―
- 私たちの文学全集―現代国語I学習のために―
- プリント―
- めもりい―現代国語Iの思い出―
- スーパードファイル―あの日に帰りたい―現代国語I学習のために―
- 歩み―一年でこんなになった―
- 現国I―一年の歩み―現代国語I学習プリント―
- 私が作った世界で一つのファイル―現代国語I学習のために―
- プリント―
- 百人百種の感想集―人間の感じ方の違い―
- 私達の考え・思い―自分で書いたプリント―
- 六百枚余りの私たちの努力の結晶―1978年現代国語学習のためのプリント―
- 喜

楽集^{らくしゅう}—らくに読めるし喜びも楽しみも感じられる集—○学習の軌跡—将来のために—○現代国語Iの軌跡—プリント「現代国語I学習のために」—○こくご—一九七八年基町高校一年生の記録—○私たちの汗—その結晶—○我が一年間の記憶—現代国語Iの思い出—○現代国語大全集—OKUMOTO現代国語のすべて—○現代国語Iを学習してきた歩み—一年分のプリントを集めて—○あゆみ—高校一年生の歩み—○私の紙の宝物—現代国語I学習のためのプリント—○「私の作った本」—一年間の努力のたまもの—○将来役に立てたいプリント—現代国語学習のために—プリント—○三人そろえばもんじゅの知恵—現代国語学習のために—プリント—○討論集—みんなの声—○学生の出発^{たびだち}—僕らの軌跡—○現代国語をより興味深くするプリント集—学習のために—○THE EXTRA 国語辞典—これでY.M.C.A.河合塾もまっ青—○十六歳の刻み—○のちのおもいでに—プリントがいっぱい—○ほかだけのファイル—現代国語学習のために—プリント—○高校一年の学習の思い出—現代国語Iプリントの記録—○現代国語・その愛と苦闘の一年間—一年次—○軌跡—現代国語I—○自己の分身その2—ある青春の記録—○「視点」—もの見方・考え方について—○現代国語の友—思想・思考の拡大をめざして—○「友の目」—自分と同じ立場でどこまで考えられるか—○現代国語Iの記録

この「ファイルづくり」から学んだこととして記入しているものからいくつかをとりあげる。

- a ある規定に基づいて記入する。それが印刷されてファイル一冊のページとなる喜びだ。世界に二つとない貴重な本を作りあげた優越感は何ともいえない。番号整理はこれからも役立つと思う。
- b 記録することの重要性である。あとになって急にある材料が見たくなったりとき、それが引き出せるようではなければならぬ。もう一つ。私はよくファイルにせずためておいて提出日の前日になってあわてて整理するようになったことがあった。そういうときに「ふだんの積み重ねが大切なんだなあ。」とつくづく思ったものである。
- c 私はこれまでに、これ程多くのプリントを整理したことがなかった。このファイルに目次をつけたりする時にはとまどった。このファイルづくりを通して、私はプリントに限らず種々な印刷物の整理のしかたを学んだ。このおかげでかなりの量でも行方不明になることなく整理する自信がついた。
- d きちんとしたことのむずかしさ。自分の創造性をどのように出すか。その個人差を見て自分の創造性のなさ、整理能力のなさに気づき、模倣からでもその習慣を身につけようと思うようになったことはたしかである。
- e このファイルづくりから学んだことは、非常に大きい。第一に物をまとめ、さらに使いやすく、見やすくする工夫が必要であると感じた。残念ながら現在充分に工夫がなされていない。第二に自分の考えと他人の考えとのちがいが共通点のはっきりしてきたこと。またそれによってどのように書けば効果的かと考えたこと。
- f 第三に、おのれの字がいかにきたないかを思い知らされたこと。

ファイルづくりの楽しさである。表紙を書いて目次と見出しをつけてみると、プリントが本のようになるとても意義あるものに見える。もう一つは、書くことの大切さである。ただ授業の終わりに「……について書いてこい。」と言われて書くだけでは、そのうち書くこともおもしろくなくなり出さなくなっていたと思う。しかし、プリントにしてファイルすることにより書くことの大切さがわかったような気がする。

G 一度きりの人生、積み重ねの大切さを学んだと思う。一日で六百枚のプリントを作ることファイルすることも難かしいけれど一年間ではそれが自然とできる。途中で怠けることもあったけど、地道な努力が確かな実りと収穫につながっていくんだとあらためて感じた。それに他人の考えというものをいろいろ知ることができた。自分だけの考えでなく、広く他の人の考えを知ることができほんとうに勉強になったと思う。

「ボリューム」重視に反撥を感じたものもいた。しかし、手にとってみてもずっしりと重いファイルについて多くのものが語っている。いつまでも大事にしたいと。ファイルをどのように効果的に活用していくか、またどのくらい読み返され、学習を進めていくうえで参考にされたかの把握は不十分だが、生徒個々の手もとに、ひとつの集積としての「作品集」が生まれたことは確かである。

V おわりに

—「現代国語学習法」を求めて—

高校一年次は、「現代国語」の基盤づくりの一年間であり、国語学習の方向を決定づける重要な一年間といえよう。中学校時代の国語学習と比べて、高校における「現代国語」の学習には戸惑いを感じているものがかかりいる。それには、国語科学習を含めて各教科内容の複雑さ、進度の問題等がからみあっていることはいうまでもない。しかし、この基盤づくりとしての一年間に「現代国語」に立ち向かう姿勢を確立させることが急務である。

生徒自らが学びとっていく態度は、自然に身につくものではなく、日々の学習活動の体験を確実に定着させることによって、絶えず自己反省を行なう機会を与えねばならない。また、そのことによって力強く豊かな学習体験をめざすようによくふうを重ね、その機会と刺激を与えていくことが必要である。そのために次の諸点に特に留意したい。

A 読書領域の拡大／B ノート自覚への誘い／C 書くことの練磨／D 学習法の発見

A 読書領域の拡大

一年間の学習活動をふりかえらせたとき、生徒の痛切な反省のひとつは読書に関することである。高校時代における読書は、とくに文学の領域に傾斜せぬようにし、社会科学、自然科学の分野にも目を向ける幅広い領域を開拓することが望ましい。しかし、私の場合、実際の指導において、そういう方向への努力が十分であったとは言えない。課題読書として月一冊を目標としたものの、結局は各学期一回に終わってしまった。五十三年度においては、「老人と海」・

「蒼き狼」(夏休み)・「鷗外短篇集」・「出家とその弟子」をとりあげた。一学期には「私の読みたい本」を書かせて紹介した。二学期末にはひとつの試みとして「新潮文庫目録」を読んで、『読みたい作品五冊』をあげさせ、プリントして配布した。このような読書への刺激を多くの機会をとらえて与えること、それらによって読書意欲を少しでもかきたてながら、高校生としての読書世界を開拓してゆくことも、さらにくふうを重ねなければならぬ点である。

B ノート自覚への誘い

ノートは学習の記録として、また自己の分身として、自己の学習活動を刻み込んだ歴史として大事にさせてゆきたいものである。各学期二回ノートを提出させて評価をした。ノートのポリシーをめぐらすこと、薄いノートは学習の貧しさを示す、ポリシーームはやがて質に変化することを強調した。『形』を大事にし、表紙・記名・目次・ページ・見出し欄(復習の証拠)の活用などを指示した。学習活動の流れを示す意図から板書が多くなりがちで、生徒の声の中には板書の筆記におわれたという反省もみられた。私自身も形式に少しこだわり過ぎたとの反省をしている。実態においては、生徒自身が何を目標として、いかなる学習活動をしたかについて、記録意識にめざめ十全なものを記録しえたとはいえない。しかし、ノート(記録)を大事にしたいという気持ちがありつつあったことは確かである。

学習ノートが真に自己の学習の証明となるために、指導者としての自身の授業の組織化とその指導法との確立を再検討しなければならぬと思う。ノート自覚が、一年次において確立されなければ、

その後の「現代国語学習」を力強いものにするにはむずかしい。

C 書くことの練磨

書くことの力は「書くこと」の学習活動をおして向上する。書く機会を多く発見して、条件をつけて書かせるようにした。記入用紙も一定の形式を定め、注意事項を刷りこんだものを作成した。読書感想文以外は、二百字・たて罫・白紙のもの三種を用い、レックで焼きつけ印刷にかけるのに便利な大きさのものを用意した。

書かせたものはすべてプリントにして配布した。Ⅲの補助資料の項であげた○印のものが一年次において書いたものである。「読んでは書き、考えては書き、話しては書く」ということを目標にして書くことの活動を体験させた。生徒は「書くこと」に対してとくに抵抗感を示さなかった。

体系的な目標のもと、あらかじめ年間計画の中に明確に位置づけ、各種の条件をつけて書く機会を最大限に利用し、これからさらに「書く力」を育成してゆきたい。

D 学習法の発見

三年生が書いた『現代国語学習は何流か』の実例を示して、一年生としての各自の学習法を書かせて自覚を促した。「学習法」をどのように身につけてゆくかが問題であり、具体的に学習活動をおして模索してゆくように手をさし伸べてやらねば、ただ考えた、反省してみた、という思いにとどまる。生徒は自ら学びとろうという意欲を心の底にもち、どうにかして自己の国語力を力強いものにしたという願いをもっている。この気持ちを消さぬように、その願いを叶えてやるようにすることが私の責務である。

また、三年生が卒業を前にして書いた国語学習についての「後輩への助言」をとりあげた。三年間の学習の総反省として決して豊かな内容とは言えないが、二度とかえらぬ思いをこめて最も痛切なことはが刻みこまれていた。これをプリントにして与え、一年生として受けとめるべきものを発見させようとした。自己の「学習法」発見の契機にもなればと考えたからである。

「学習法」の発見は、何げなく拾いあげるようなものではあるまい。力強く個性的な学習法をどのように自分のものとするか、機会をとらえて具体的に助言してゆく必要がある。学習者に対しては、読書領域とその体験を拡大深化させ、書くことの自覚を促し、良い刺戟と感化のもとに自己の学習法を反省させ、指導者自身として、「学習法」を発見し身につけることができるような学習活動を積み重ねる計画を持たねばならぬ。さらに、そのことを効果的に進めるために「個人カルテ」を作成し、個別指導の機会とくふうを地道に探求してゆかねばならないと考えている。

(広島市立舟入高等学校教諭)